

【11月第2週のメッセージ】

■日時：2020年11月8日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「自分を捨て、自分の十字架を背負い、私に従いなさい。」

■聖書：マルコによる福音書第8章27節－9章1節

■讃美歌：231「久しく待ちにし」・300「十字架のもとに」

お早うございます。

朝晩は、めっきり冷え込んでまいりました。

皆様、健康は守られているでしょうか？

年を重ねると共に、暑さ、寒さに素早く対応するのが難しくなるように感じています。

さて、マルコによる福音書の学びを続けましょう。

始めに8章27節からです。30節までをお読みします。

27：イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。

28：弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』という人もいます。」

29：そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」

30：するとイエスは、自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

フィリポ・カイサリア地方とは、ガリラヤ湖の北の方で、約40kmの距離にあります。旅にして2日間の行程でした。そこを旅しながら、イエス様は弟子たちに語りかけます。「人々は、わたしのことを何者だと言っているのか」と。

これまでの病人への癒やし、悪霊の追放、パンの奇跡など、人々の前で力ある業を次々になされたイエス様を、人々はどのように考えているのかを弟子たちに尋ねられたのです。それに対し弟子たちは、人々が「洗礼者ヨハネだ」、あるいは「エリヤだ」、さらには「預言者の一人だ」と話していることを紹介しました。

しかし、ここでイエス様が弟子たちに尋ねられた理由は、人々がイエス様のことを何と言っているのかも重要ですが、それと共に、むしろそれ以上に、弟子たちが自分のことをどう思っているのかを知ることでもありました。

その力ある業の故に、時の権力者との緊張関係が生まれ、命までも狙われ始めたイエス様です。身に迫る迫害を覚えつつ、最も身近にいる弟子たち、自らが選び、寝食を共にし、その全ての業を見、全ての言葉を聴いている弟子たちこそ、自分をどのような者として受け止め、考えているのかを知ることでした。自分について人々は何と言っているのか、それは分った、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」。この問いこそ、イエス様にとって人々の理解を知る以上に大切なことでした。

すでに戦いは始まっていました。

イエス様の名はユダヤ全土に知れ渡り、知れ渡ることによって、時の権力者である長老、祭司長、律法学者たちとの関係は決して妥協を許さないものとなっていたからです。

この時、イエス様が求めたのは、神の独り子として、神様から与えられている使命を理解する者の存在でした。これから自分が歩まなければならない十字架への道、そのことが受け止められることにより、どれほど慰められ、励まされることかとの思いでした。

この時、ペトロが答えるのです、「あなたはメシアです」と。

メシアとは、救い主です。旧約の時代から、預言者たちによってその到来を預言されていた救い主です。イエス様、あなたこそそのお方ですと、ペトロは答えました。

見事な答えでした。

イエス様が求めていた答えでした。

ペトロのこの言葉によって、イエス様はどれほど喜び、力を得、慰められたか分かりません。

十字架の道を歩き進むのに、もはや一人ではないのです。

少なくとも、ペトロだけは自分の使命を理解してくれている。

神様から遣わされたメシアであること、救い主であることが分かってくれている。

迫害の危機が迫っている今この時、どれほど大きな慰めであり、又勇気が与えられるペト

ロの告白であったのでしょうか。「あなたは、メシア、救い主です」との言葉が。

しかし、同時にこの告白に対し、イエス様は弟子たちに命じます。自分のことを誰にも話さないようにと。

この命令は、メシアと言う言葉に対する人々の誤解を避けるためです。その誤解は、弟子たちの中にも存在していました。つまり、イエス様を、ローマの支配から解放する救い主、政治的指導者であるとの誤解です。

イエス様の救いの業は、ローマ帝国からのユダヤの政治的解放ではありません。

罪の縄目から人々を解き放ち、神様との間に横たわっている隔ての中垣を取り除くことです。

しかし、このようなイエス様に与えられた使命を正しく理解することは人々には出来ないのです。だからこそ、人々に誤解されないために、弟子たちに命じます。自分がメシアであることは誰にも言うてはいけな

続いて、ペトロの告白に促されるように、イエス様は神様から与えられている使命について弟子たちに教え始められました。

31 節から 33 節です。

31：それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、3 日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。

32：しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。

33：イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

大切な場面です。

イエス様とペトロとのやり取りが、これほどの緊迫感を持ってマルコが記している箇所はないように思います。

32 節にある、「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。」とある、「いさめる」と言う言葉ですが、この言葉は 33 節の「ペトロを叱って言われた」の中の「叱って」と同じ言葉です。つまり、ペトロはイエス様を弟子たちの中から外へと連れ出して叱りつけ、それに対し、イエス様は弟子たちの前でペトロを叱りつけたのです。

師であるイエス様を弟子のペトロが叱りつけると言うのはおかしい話しのようには思われますが、そうではなく、ペトロは、愛するイエス様のご自分の十字架の死を予告されたことに対して耐えきれませんでした。愛し、慕い、尊敬するイエス様に限って、そんなことが有

り得るはずはない、あつてはならない、イエス様、なぜそのようなことをおっしゃるのですか、止めて下さいと言う、ペトロの必死の叫びがこの言葉には込められています。単に叱ったのではありません。イエス様に対するペトロのこ

の叱責には、ペトロのイエス様に対する心の奥底から込み上げて来る愛と尊敬の思いが溢れ出しているのです。

そして、私たちは自分たちを振り返ります。

果たして、私たちに、イエス様に対するペトロのような、これほどの深い愛と尊敬があるかということです。

このペトロの叱責を受け、イエス様は、それに対し、今度は、弟子たちの前でペトロを叱りつけます。その言葉の厳しさは、類をみないものでした。即ち、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

弟子たちの中で、最も信頼し、大切に思っていたペトロです。

そのペトロに対し、イエス様は「サタン」と呼びました。「サタン、引き下がれ。」「悪魔よ、引き下がれ」と言われました。

あまりにも激しいイエス様の言葉です。

もし、自分がこの言葉をイエス様から言われたら、二度と立ち上がることは出来ないと思います。

イエス様は、なぜ、このような激しい言葉をペトロに返したのでしょうか。

ペトロに対する全面否定です。

ここで、私たちは、やはりそうなのかと思えます。

神様に従って生きる事、つまりイエス様について行く事がどのような事かを、この激しい拒絶の言葉を通して改めて考えさせられます。

イエス様が否定されたのは、ペトロの人間的な思い、ペトロのイエス様に対する、その愛から生まれる、殺されて欲しくないとの人としての当然とも言える思いでした。

しかし、神様の使命に生きるとは、このペトロの言葉を乗り越えて生きることです。

人間として余りにも当然な思いを、使命とは乗り越えさせるものなのです。

ペトロの願いに答えることは、十字架への道を捨て、神様から与えられた使命を放棄することです。「あなたは、メシアです」とのペトロの告白を受けながら、それを否定することです。弟子たちに問われた、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」とのその問いを虚しくすることです。そして、それは同時に、「あなたは、メシアです」とのペトロの告白をも虚しくすることでした。

告白をしつつも、ペトロには、メシアであるイエス様がどのような道を歩まれるかが分かっていませんでした。それが分かるのは、後になってからのことです。

ペトロとのこのようなやりとりの後、34節以下で、ご自分に従うとはどのようなことかを教え始められました。イエス様が歩まれる道を弟子たちに知らせたいと思ったからです。

34節、35節です。

34：それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。

35：自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

イエス様の後に従いたいと思う者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って従いなさいと言うのです。

これはどのような意味でしょうか？

この言葉の意味を解く鍵は、続く35節にあります。即ち、

35：自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

自分を捨て、自分の十字架を背負ってイエス様に従う者は、イエス様のため、また福音のために命を失うが、しかし、それは命を得ることであり、その一方で、自分の命を救いたい、即ち、自分を捨てず、自分の十字架を背負わずにイエス様に従わない者は、命を失うと言うのです。

命を失う者が命を得、命を救いたい者が命を失う。

逆説的に聞こえるこの言葉を理解する鍵は、福音に生きることにあります。

イエス様を神の子と信じて、信仰を持ち、福音に生きようとする時、私たちは十字架を背負います。信仰を持って生きることに対する様々な種類の妨げです。外から負わされる十字架もあれば、自らの内から生まれ出て来る十字架もあります。自分の前に横たわるこれらの十字架を背負ってイエス様に従うのか、それとも、十字架に背を向けて生きるのかを、イエス様は尋ねられるのです。なぜなら、36節から38節です。

36：人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。

37：自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。

38：神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる。」と。

命、それは真実の命、また永遠の命です。

その命を得るために、与えられた十字架を背負うのか否か、それは福音を信じ、福音に生きるのか否かと言うことです。

そして、私たちは自分の十字架を背負い、福音に生きる道を選びました。

自らの十字架を背負い、福音に生きる道は、平坦な道ではありません。

山あり、谷ありの道です。

時として、厳しい嵐も襲って来ます。

しかし、どんな時にも、私一人ではありません。

主が共にいて下さいます。

自分の負うべき十字架であるにもかかわらず、自分が招いた試練であり、困難であるにもかかわらず、私一人が負っていたのではなく、主が共に負っていて下さいました。

自らの責任で招いた試練であるにもかかわらず、主が共に試練に立ち向かっていて下さいました。そして、今、あるのです。

私の恵みは、あなたに十分である。

その通りなのです。

最後の1節です。

1：また、イエスは言われた。「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

イエス様に従って行く時に襲い来る迫害のただ中であって、神の国の到来がすぐそこに来ていると言う励ましの言葉です。

主よ、来たりませとの祈りと希望の中に、私たちも又福音に生き続ける者になりたいと思います。

祈りましょう。

2020年11月9日（月）

立川教会牧師飯島信